

機関番号：24601

研究種目：基盤 C

研究期間：平成 20 年～22 年度

課題番号：20590517

研究課題名

(和文) 医療職に向けられた暴力的言動の発生件数の把握とその疫学的解析

研究課題名

(英文) Epidemiological analysis of the incidence of patients' aggression and violence toward health care workers.

研究代表者 車谷 典男 (KURUMATANI NORIO)

奈良県立医科大学・医学部・教授

研究者番号：10124877

研究成果の概要 (和文)：

患者やその関係者による医療従事者の暴力的言動被害を調査し、奈良県内の医師 953 人、看護師 6987 人、看護補助者 1663 人、事務職員 2254 人から結果を得た。約 61% の医師、看護師に被害経験があり、そのうち最も深刻な被害について、IES-R 日本語版で PTSD を疑われる者が、被害経験者の医師のうち 9.4%、看護師では 7.4%、看護補助者では 8.6%、事務職員では 4.5% みられた。

研究成果の概要 (英文)：

This study investigated the incidence of patients' violence toward healthcare workers and its psychological influences. We collected complete answers from 953 doctors, 6987 nurses, 1663 nursing-support workers, and 2254 clerks for analysis. Prevalence of violence in their career was about 60%, and that in previous 12 months was about 20% among doctors and nurses. Some of healthcare workers with an experience of violence (9.4% of doctors, 7.4% of nurses, 8.6% of nursing-support workers) exceeded the cut off score of IES-R-J (25 point) set for screening PTSD.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|-------|-----------|-----------|-----------|
| 20 年度 | 1,500,000 | 450,000 | 1,950,000 |
| 21 年度 | 1,100,000 | 330,000 | 1,430,000 |
| 22 年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 総計 | 3,600,000 | 1,050,000 | 4,680,000 |

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：境界医学・医療社会学

キーワード：病院管理学

1. 研究開始当初の背景

医療現場では、患者やその関係者による脅迫的暴力的被害が医療従事者にしばしば発生している。こうした被害は、医療の根本である医療従事者と患者の相互信頼関係を損ない、ひいては医療の質の低下をもたらす可能性がある。医療は、提供する側、受ける側の双方が協力して作りあげるものと考えることができる。

したがって、そうした被害の対策の必要性は言うまでもないが、しかし、対策を考える上で、たとえば、どのような被害がどの程度

の頻度で、どの職種に発生しているのか、そしてその影響はどのように職務に影響を及ぼしているのかといった基礎的な知見ですら、国内外に見るべきものはほとんどない。

2. 研究の目的

そうした基礎的な知見を得ることを目的とした。具体的には、①脅迫的暴力的被害の経験割合を明らかにする、②年間の発生率を明らかにする、③被害による心理的影響を明らかにする、④職種による違いを検討する、⑤対策の手かかりを得る、5 項目とした。

3. 研究の方法

独自に作成した無記名自記式調査票を用いた。対象者の基本属性、脅迫的暴力的被害の経験、それによる影響などについて、予め用意した選択肢の中から回答を求めた。本調査で用いた暴力被害の定義と分類を表1に示す。

医師については、2008年の奈良県医師会名簿に掲載されていた全員に、調査票を郵送にて配布回収した。

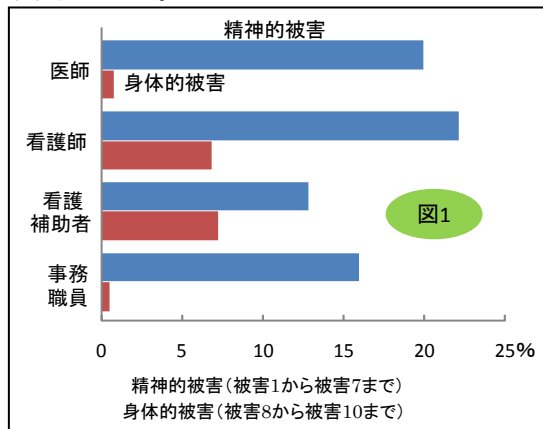
看護師・准看護師(以下、看護師と呼ぶ)、看護業務補助者(以下、看護補助者)、事務職員については、①診療所勤務者に対しては、調査票4部を郵送にて配布回収、②病院勤務者に対しては、対象者数の事前把握が困難であったため、推定勤務者人数分の調査票を各病院へ一括郵送し、該当者に配布し回収することを病院担当者に依頼した。

表1 脅迫的暴力被害の定義と分類

| | |
|------|----------------------------------|
| 被害1 | 言葉での性的いやがらせ |
| 被害2 | 性的いやがらせ行為や性的被害 |
| 被害3 | 対面しない方法での脅迫・いやがらせ |
| 被害4 | ストーカー行為 |
| 被害5 | 言葉の暴力 (脅迫・不当な要求・いやがらせ) |
| 被害6 | 物品の破壊行為 |
| 被害7 | 凶器を示す脅迫 |
| 被害8 | 軽度の肉体的暴力 (治療不要 or 1週間以内の治療期間) |
| 被害9 | 中等度の肉体的暴力 (治療期間が1週間～1か月) |
| 被害10 | 重度の肉体的暴力 (治療期間が1か月を超える) |

4. 研究成果

職種別の回収率は医師が51.4%、看護師・看護補助者・事務職員が73.9%で、全体では71.4%であった。これらのうちほぼ全問が無効回答であった医師42人と非医師106人を除き、残った医師953人、看護師6987人、看護補助者1663人、事務職員2254人を分析対象者とした。



(1) 生涯被害経験割合

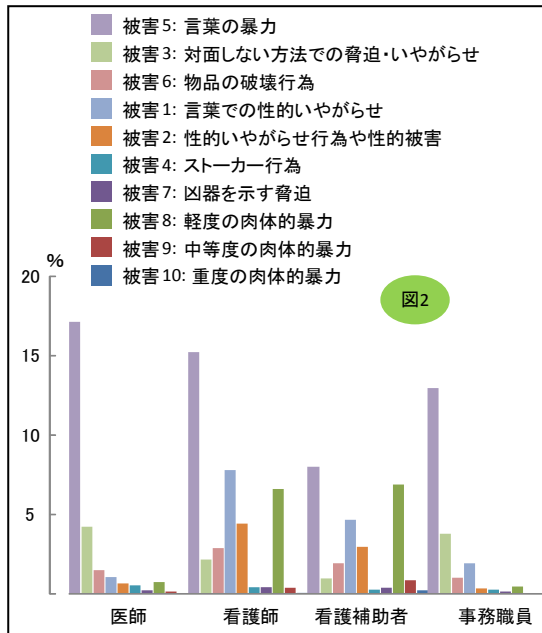
現在の職業に就いてからこれまでの間(生涯)に、被害1から被害10までのいずれかの被害を経験したことがある者の割合は、医師が61.3%(584/953)、看護師60.5%(4224/6987)、看護補助者が37.9%(630/1663)、事務職員が36.7%(828/2254)であった。これらの割合は就労年数の長さの影響を受けるが、平均就労年数は順に27.8年、13.3年、7.5年、8.6年であった。

(2) 過去1年間の被害経験割合

図1に「過去1年間」の被害の経験割合を精神的被害と身体的被害に分けて示す。複数回経験していても1件に計上した結果である(period prevalence)。精神的被害では看護師が最も高く20%を超え、医師がこれに次いでいる。身体的被害については看護補助者と看護師が6-7%と、医師・事務職に比べて明らかに高率であった。

図2は、被害別に同じく「過去1年間」の経験割合を示したものである。医師に注目して、経験割合の高い順に並べてある。いずれの職種も、被害5が最も多い。医師と事務職員では、被害3がその次に多い。電話などによるものと思われる。女性が多い看護師、と看護補助者では、被害1あるいは被害8が続く。

図示していないが、こうした被害の警察への通報割合は、医師の場合で7.7%(19/248件)、看護師で2.0%(57/2812件)、看護補助者で0.7%(3/448件)、事務職員で10.9%(51/467件)であった。



(3) 被害の年間発生率

図3から図6はいずれも、一人の人が「過去1年間」に複数件数を経験している場合、

それぞれを1件として計上し、実労働時間千時間あたりの発生頻度(incidence)を示したものである。図3から図5の縦軸の値は、実労働時間千時間当たりの脅迫的暴力的被害の発生件数を表す。今回の対象者は年平均約2千時間の労働時間であったことから、次の値に匹敵する。

①一人の職場(診療所規模)とすれば、縦軸の0.4、0.8、1.2、1.6、2.0は、そうした被害に遭遇する確率が、順に15か月、7.5か月、5か月、3.75か月、3か月に1回あることを意味する。

②50人の職場(7:1看護の350床規模の病院)とすれば、縦軸の0.4、0.8、1.2、1.6、2.0は、誰か一人がそうした被害に遭遇する確率が、順に9日、4.5日、3日、2.25日、1.8日に1回あることを意味する。

③一般に、N人の職場で、労働時間千時間当たりの発生数E(図の縦軸の値)の場合、誰か一人がMか月に1回遭遇する関係を示す一般式は $1(\text{年})/(2 * E) = N * (M/12)$ となる。変形して $M = 1/(2 * E) * (12/N)$ を求めることができる。

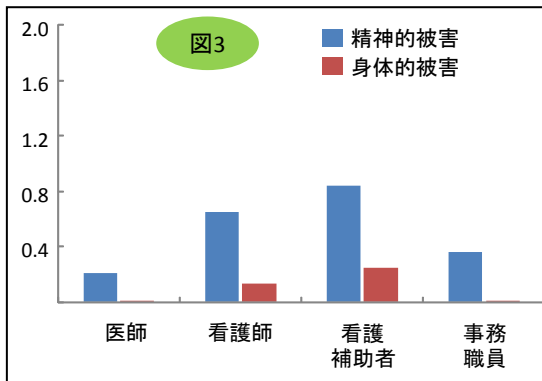


図3は、精神的被害と身体的被害に分類した結果である。いずれの被害ともに看護補助者が最も高い。精神的被害が0.8前後であるが、50人の看護補助者がいる職場では、4.5日に1回の割合で、誰か一人はその被害にしていることを意味する。看護補助者に次ぎ看護師が高く、事務職員、医師の順となっている。

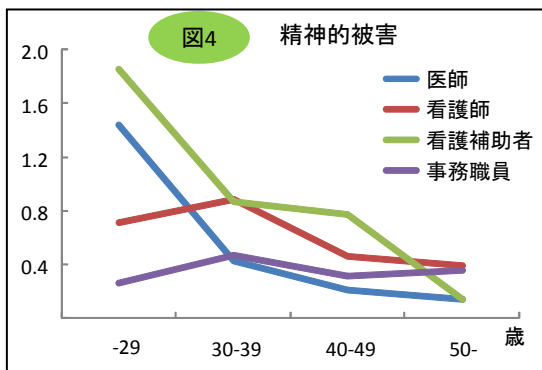
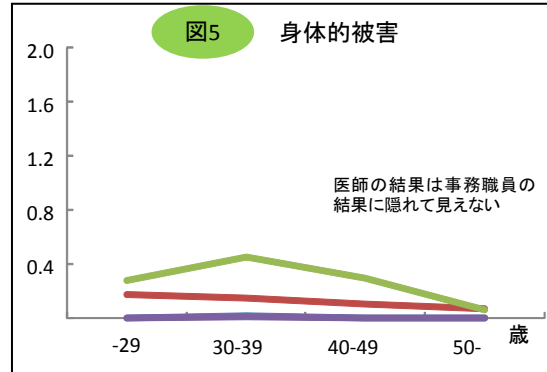


図4と図5は、図3の結果を10歳年齢階

級別に検討したものである。

全体的に若い年齢層に高い傾向がうかがえるが、必ずしも明瞭ではない。最も高い値は、精神的被害の看護補助者の20歳代の1.9であるが、これは50人が従事している職場では1.8日に1回、誰か一人は被害にしていることに相当する。



(4)暴力被害の影響(心的外傷ストレス)

PTSDのスクリーニングとしても使用されているIES-R日本語版(22項目・88点満点)を用いて心的外傷ストレスを調査した。点数が高いほど影響が大きく、25点以上が調査票上PTSDと診断される。

| | ①有効回答者数 | ②これまでに被害経験あり | ③IES-Rが25点以上の者 |
|-------|---------|--------------|----------------|
| 医師 | 953 | 584 | 55 |
| 看護師 | 6987 | 4224 | 311 |
| 看護補助者 | 1663 | 630 | 54 |
| 事務職員 | 2254 | 828 | 37 |

| | ①に対する割合 | ②に対する割合 |
|-------|---------|---------|
| 医師 | 61.3 | 9.4 |
| 看護師 | 60.5 | 7.4 |
| 看護補助者 | 37.9 | 8.6 |
| 事務職員 | 36.7 | 4.5 |

| | 医師 | | | | 看護師・看護補助者・事務職員 | | | |
|------|----|------|------|-------|----------------|------|------|-------|
| | 人数 | 平均 | SD | 25点以上 | 人数 | 平均 | SD | 25点以上 |
| 被害1 | 1 | 3.0 | - | - | 99 | 8.3 | 13.9 | 11.1 |
| 被害2 | 1 | 50.0 | - | - | 114 | 9.7 | 13.4 | 8.8 |
| 被害3 | 10 | 13.2 | 20.7 | 20.0 | 22 | 13.0 | 13.3 | 18.2 |
| 被害4 | 1 | 17.0 | - | - | 6 | 25.7 | 36.4 | - |
| 被害5 | 74 | 11.0 | 14.3 | 17.6 | 317 | 14.3 | 15.4 | 21.5 |
| 被害6 | 3 | 4.3 | 6.7 | - | 41 | 16.1 | 19.5 | 29.3 |
| 被害7 | 1 | 5.0 | - | - | 5 | 9.6 | 10.9 | - |
| 被害8 | 1 | 2.0 | - | - | 130 | 9.3 | 14.2 | 14.6 |
| 被害9 | 1 | 54.0 | - | - | 14 | 20.6 | 15.5 | 42.9 |
| 被害10 | 0 | - | - | - | 3 | 24.7 | 39.3 | - |

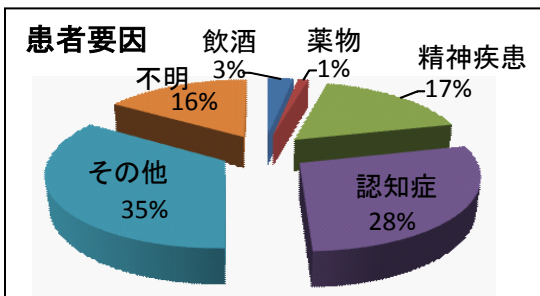
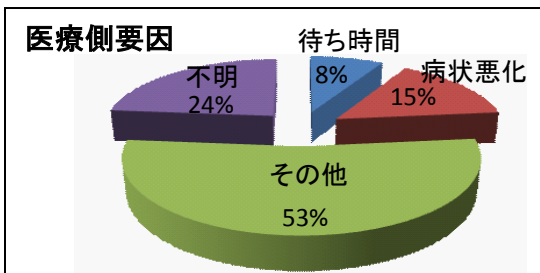
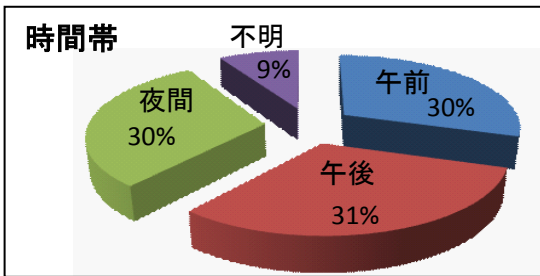
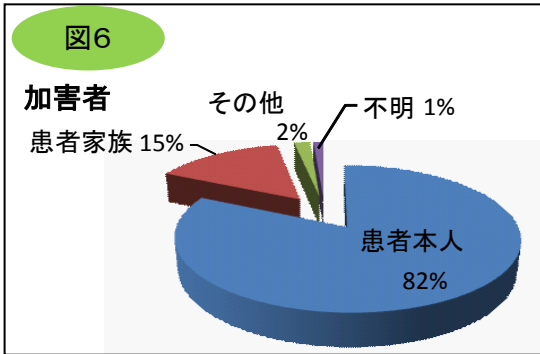
(網かけの平均値は人数が少ないため参考値)

表2に、これまでに経験した脅迫的暴力的被害の中で、最も深刻な被害に対する最近一週間のIES-Rの評価が25点以上であった者の割合を示す。これまでに被害経験ありの者のうち、医師が9.4%と最も多く、看護補助者、看護師、事務職員の順に続いた。

表3に、過去1年に経験した被害の種類別のIES-Rの平均点(標準偏差)と25点以上の者の割合(対象人数が10人以上)を示す。

(5) 暴力被害発生の要因

図6に、全職種を合計した過去1週間に経験した被害の要因内訳を示す。加害者としては患者の家族が15%、時間帯としては患者数が相対的に少ない夜間の割合が30%と他の時間帯と同じ割合を占めていた。患者側要因、医療側要因のうち従来から指摘されている要因は約半数にとどまっていた。



(6) 考察

今回の調査は、医師の回収率が50%程度にとどまったこと、リコールバイアスが不可避

であること、被害に対する評価が医療従事者側からだけであることなどの問題点が存在する。しかし、国際的に見ても大規模な調査であること、被害を分類してそれぞれの経験割合と発生率(おそらく過小評価)を求めたこと、被害が長く心的外傷を与えるとともに、職務遂行にも影響すること、これらは職種によって特徴のあることを明らかにしたことは、被害従来にない新しい知見で、対策のための重要な基礎情報を提供するものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

佐伯圭吾、車谷典男、医療従事者に対する脅迫的暴力的事例に関する第一次横断調査結果、奈良県医師新報、査読なし、第679号、2010、46-51

佐伯圭吾、車谷典男、岡本康幸、奥地一夫、医療従事者に対する患者暴力の記述疫学、奈良医学雑誌、査読あり、61巻、2010、127-134

〔学会発表〕(計5件)

1) 佐伯圭吾、車谷典男、第67回日本公衆衛生学会総会、医療従事者に対する脅迫的暴力的言動の実態について奈良県医師会予備調査結果から、福岡国際会議場

2) 佐伯圭吾、車谷典男、国際疫学会西太平洋地域学術会議、Physicians' risk factors of non-physical outpatient violence、2010、埼玉県立大学

3) 車谷典男、佐伯圭吾、第69回日本公衆衛生学会総会、看護師・看護補助者・事務職員への暴力被害の頻度 奈良県医療従事者調査・第1報、2010、東京国際フォーラム

4) 佐伯圭吾、車谷典男、第69回日本公衆衛生学会総会、看護師・看護補助者・事務職員への暴力被害の危険因子 奈良県医療従事者調査・第2報、2010、東京国際フォーラム

5) Keigo Saeki, Norio Kurumatani, American Public Health Association 138th annual meeting & expo 2010, Region based study on incidence rate of patients' violence toward nurse, nursing support workers, and clerk. 2010

〔その他〕

新聞掲載

奈良新聞平成22年7月17日土曜日朝刊

産経新聞平成22年7月17日土曜日朝刊

毎日新聞平成22年7月17日土曜日夕刊

朝日新聞平成 22 年 7 月 18 日日曜日朝刊
新潟新聞平成 22 年 11 月 29 日月曜日朝刊
河北新聞平成 22 年 12 月 1 日水曜日朝刊

6. 研究組織

(1)研究代表者

車谷 典男 (KURUMATANI, NORIO)

奈良県立医科大学医学部・教授

研究者番号：10124877

(2)研究分担者

岡本 康幸 (OKAMOTO, YASUYUKI)

奈良県立医科大学医学部・教授

研究者番号：70145879

奥地 一夫 (OKUCHI, KAZUO)

奈良県立医科大学医学部・教授

研究者番号：50204136

佐伯 圭吾 (SAEKI, KEIGO)

奈良県立医科大学医学部・助教

研究者番号：60364056